

平成 28 年度桑名地方創生会議 事業検証会議 会議概要

日時・場所	平成 28 年 5 月 9 日（月）15：30～18：00 桑名市役所本庁舎 3 階第二会議室
出席者	委員 5 名 事務局 4 名 市 12 名
会議次第	1. 開会 2. 市長あいさつ 3. 委員自己紹介 4. 役員選出について 5. 2016 年ジュニア・サミット in 三重について 6. 検証事項 平成 27 年度 地方創生先行型交付金事業について 7. その他 平成 28 年度 地方創生加速化交付金事業について 8. 閉会
概要 (主な意見)	<u>6. 各事業について担当課より説明後、委員講評</u> ・ 具体的な内容が多く、結果が見えていてよかった。いい経験、いいお金の使い方をしたのではないかと思われる。 ・ 事業はこれからも継続していくと思われるので、今回の経験を活かして、市民と共に動くということを形にしていってほしい。 ・ KPI 値を達成していない事業が 3 つあるが、特に達成できていないとは思わない。 ・ それぞれ単体の課で取り組むのではなく、横の連携をとっていろいろな協議をして進めていただきたい。 ・ サイトやコンサルティング料にも大分費用がかかっている。事業の広がりを見せるためには、何かもう一つ仕掛けが必要ではないか。 <u>◆事業⑧消防団活動事業について</u> ・ 消防団活動事業については、何年間も継続して効果が大きく現れるものである。高齢化や少子化という社会情勢もあり、どう改善していけばいいのか長い目で見ていく必要がある。 ・ 消防団のことを考えるのが、消防本部総務課だけでいいのか。縦割りということはほとんどないと思うが、もう一步連携するということがあってもいいのではないか。 ・ 小中学校で子どもに現在の消防団の在り方を教えることにより、子どもたちが消防団のことを考えるようになり、それが親に伝わって

	活動に反映してくるということもあると思われる。 ・市民活動や互連協等、防災関係に関する集まりはたくさんある。そうした所への呼びかけがあると、もう少し広がるのではないかな。 ・消防団というと、いきなり火事の際に出動するというイメージがあり、ハードルが高い。まずは消防団をお手伝いする、協力するというスモールステップからでないといけない。 ・消防団のなり手が少ないのであれば、住民全体の消防能力を底上げするという必要ではないかな。炊き出しや消火栓の使い方等を体験することにより、いざとなったら自分はどうやって暮らすのかということを考える機会になる。 ・消防団員というのは、「消防団員」という名前でなければいけないのか。市民が身近に防災意識を持てるよう、「防災団員」や「市民守り隊」などに変えることはできないのか。防災の取組みの中で、自分たちがリーダーとしてやるのだという意識を持ってもらうために、名前を変えてもいいのではないかと感じた。 ◆事業⑬「桑名力発信推進事業」、事業⑮「資料保存事業」 ・「桑名の千羽鶴」については、折り方を知らない親も多い。子どもに伝えていくためには、まず親が知る必要がある。そのためには折り方を教える人を増やす必要があり、博物館でも体験できるということや、千代紙などが売っている場所をPRしていく必要がある。 ・鶴の折り方を教えたときに、実は博物館にもあるということ伝えるだけでは博物館には来ない。地図や説明等が書かれたものがあれば来館者が増えるのではないかと感じた。 ・博物館で体験コーナーを設けてしっかりやっても、やっぱりどこかそれが伝わっていない。 ・折鶴には千代紙が必要だが、製図からというのは敷居が高い。コストは高くつくかもしれないが、ハサミがあればできるというような材料を、スーパーなど身近なところで買うことができれば、もっと広まっていくと思われる。 ・6,000 人の市民に1年間に1回鶴を折る体験をしてもらうとして、もしその人たちが千代紙を買おうとなれば、それだけで相当な需要になる。 ・2つの本（「連鶴資料集 - 魯縞庵義道と桑名の千羽鶴 - 」「徳川四天王の城 - 桑名城絵図」）は、個人的に買おうかと思うくらいである。こういうものを発信すれば、外国人にとってはたまらなく魅力的で
--	--

ある。

- ・ 1つのセクションだけで考えるのではなく、すべての課で、それぞれ何ができるのかを考えるような集まりがあってもいいのではないかな。

7. 平成 28 年度地方創生加速化交付金事業の説明後、委員講評

竹取プロジェクト推進事業

- ・ このような経験を積むということに意味がある。みんなで地域の問題を考え、最終的には自主独立した事業主体ができ上がれば、その手法が竹だけではなく、蛤や一次産業の何か違う作物にも応用できるかもしれない。
- ・ 生産者に六次化からと言っても、マーケティングやコラボをするのは難しい。市が火付け役となって事業主体を作り、プロの目で竹の利用方法を見ていくと、売り先ができていく。
- ・ 事業者を、作る人と売る人に分けて、役割分担しながら共に働く仕組みができると、それぞれが土地を守ることや竹を作ることに専念できる。今度は「こんな竹はできないか」「こういうふうにしてくれないか」となり、それに向かうことによって生産の改革ができていく。
- ・ 市民が竹を意識するという意味でも、竹取というネーミングはすばらしい。
- ・ 現実的に高齢化という問題があるため、若い人たちの新規就農や、人を呼び込むという形で事業が進んでいくといい。
- ・ 高齢化を否定的に捉えず、今の時代に合わせた生産者の集約化のようなことが、こういう機会に行われてもいいかもしれない。
- ・ 桑名市のあらゆるところで竹が生えており、他の樹木が凌駕されている。環境問題の実態を知らないということはまずい。

国際観光まちづくり KUWANA 推進事業

- ・ 桑名にはいろいろな産業観光の資源として、伝統芸能や産業がある。アジアや欧米の人は、そこで中小企業の教育の仕方や工場管理の仕方などを学びたいと思っている。
- ・ 台湾などでよくやっている教育旅行というのは、日本でいう修学旅行のことである。ジュニア・サミットで盛り上がっている小中学校の子どもたちと、台湾など海外から来た子どもたちが一緒になって何かに取り組むということも、一つの観光、教育観光である。

	・三重県下では桑名にしかない「芸妓文化」というものがあり、芸者衆が 14 名程いる。こういったものも観光資源の一つとして、桑名の歴史の深さをアピールできる。 ・伝統芸能について、ここが「本物」を見せられる場所だと発信する。連鶴は桑名に行かないと「本物」を学べないというように、連鶴観光みたいなものもあってもいい。 ・観光地を回る観光だけではなく、芸妓文化や連鶴など、桑名の「本物」の中には教育や産業もあるので、それらを見に来る観光があってもいいのではないか。それを考えることが今回の取り組みであると理解している。 ・市が国際観光まちづくりという方に向いたことで、大きく変わってきたと感じている。ついこの間までは、外国人について興味を持っていていなかったようだが、最近は理解してくれていると思うことが増えた。 ・ジュニア・サミットが成功し、桑名市は国際都市となったと言える。市民が国際都市であるということを、より誇りを持って実行していくには、桑名にある「本物」を世界の中で評価してもらい、体験してもらうことが必要である。
担当課	市長公室 政策経営課